

まず、ポスト・ローマ期におけるカリアの言語状況であるが、カザルのカリア征服により正式言語となるラテン語は、公用語としてポスト・ローマ期も語を継承する。エリートを対象とした正式な言語教育が行われていた。書言葉としてのラテン語(文語ラテン語)とは地域差や階級差があまりなかったが、話し言葉としての口語ラテン語は多岐にわたり、発音には地域差があり、エリートとそうでない者との教育による階層的な差もあった。一方には厳格なラテン語教育を受けた教養人たちの話す都會風の洗練された語法「ウルバニタス」が、他方には学校教育もラテン語教育も受けていなかった教養人たちの簡略で優雅さを欠く語法「セルモ・ルスタナス(田野風)」があったのである。このように語彙、形態、統語などの面で違いがあるが、発音に関してはあまり原理的差異のない同一言語の二つの変種、あるいは二つの記録形態とも現象は「ドイクシア」と呼ばれる。ウルバニタスは「高位変種」、ルスタナスは「低位変種」ということにするが、発音原則に大きな差異があったために、互いの受動的な能力により相互に理解が可能で、両者のコミュニケーションは支障なく成り立っていたのである。ところが4世紀にキリスト教が公認されて以降、教会はアラプスタス、アンプロシウス、テウレリアスといった第一級の知識人を布教の担い手とし、民衆への接近のために単述で控え目の「セルモ・フリス(謙遜語法)」を生み出したのである。ラテン語世界を普及することになる。このころの後のラテン語の姿に与えた打撃は大きく、言語変化の重要な要因が宗教であることを物語っている。6世紀には、もともと識字層の謙遜語法であったセルモ・フリスで、文字としての人々の語法であるセルモ・ルスタナスとの実質的な違いがあまり明確に区別されなくなり、農民大衆のコミュニケーションに使用されるのはすべてセルモ・ルスタナスで表現されるようになる。7世紀には、セルシヤ司教イシドルスや教皇グレゴリウス一世らは「lingua mixta(混合言語)」、という表現を用いている。彼らは話し言葉としてのセルモ・ルスタナスから別種の言語に、つまりロマンス語に近しいものになりつつある事態を述べたのである。

話し言葉としてのラテン語終焉期については、西暦500年以前説、700年以後説、600年以後説の三説あり、現在の定説は、720年ルベレスの提唱する西暦600年以後説である。おそらく7世紀にラテン語からロマンス語への変換があるためであり、その後のカール大帝による決定的なものになる。シャルルマーニの宮廷の文顧問であり、この文化運動の中心人物であったアルファンは一種原理主義的思考の持ち主であり、古典的規範への復帰によりラテン語の純化は達成されるが、発音上の古典主義への復帰にもつながることになった。つまりこの、低位変種と高位変種の併存が一元的なドイクシアの消滅をもたらしたのである。古典的規範に忠実に発音されたラテン語は、識字世界に希薄な関わりしかもたらさず人々には理解不能の言語になりしめた。その後、ラテン語は教会の公用語として、あるいはごく一部のラテン語教育を受けた教養人の間に生き残るのみ、民衆的基盤を失うことになる。こうして書言葉としてのラテン語の切り離された話し言葉は、生きて話し言葉として決定的にロマンス語への道を進み始めるのである。

次に、ポスト・ローマ期におけるドイツ語表記の出現についてであるが、ゲルマン語圏全域でルーン文字の遺物の確認されているところから、<sup>ラテン語を駆逐する</sup>能力をもった人々の表記方法として、ドイツ語表記が出現する以前はルーン文字があった可能性もある。しかしながら、ルーン文字は71年ワグニツでは90まで用いられていた。